

り「宗田文庫について」と題した記念講演がなされた。

当講演では寄贈の経緯および文庫の概要が説明され、同文庫の特色を次の三点に要約している。

1 広い意味での薬を中心とした、十五世紀から現代まで五百年にわたる日本医療文化史の一大宝庫。

2 一次資料を中心として、研究ノート・研究書・雑誌が同心円状に見事に構成されており、しかも一冊一冊、一点一点に先生の目が入っている。実証的な厳しい学風を自らに課した学者の蔵書として、まさに「文庫」として後世に伝えるに価する。

3 宗田資料（和本コピー・論文抜き刷り・ノート類）は研究資料として、後進の研究者に多大の利便を供する。

当講演のあと宗田文庫貴重品の展示と解説、また同センター図書館に設置された宗田文庫の回覧などが行われた。なお同文庫の目録は仮目録のため印刷部数が少なく、当日の参加者に配布されたのみで、一般への販売・配布はされない。

しかし宗田先生のご蔵書はこうして国有財産となったため、今後は同センターを訪れば誰でも公開利用できるようになった。本学会にとっても一大慶事であり、学会各位が広く利用されるなら、宗田先生も地下でさぞや慶ばれることであらう。

（真柳 誠）

***** 紹 介 *****

荒井保男 著

『続・医の名言』

荒井保男著『医の名言』が約三年前に発刊され、私も本誌第四十二巻第一号に書評を書いておいた。今回その続編が上梓されたので紹介する。

続編も前編を踏襲して、三十五項目の人物または記事が搭載されている。史記、ヒポクラテス、医心方、曲直瀬道三、シモンズは例外として前、続両編ともに記載されているが、全く別の視点から書かれているので新鮮味がある。

著者自らが両者の「あとがき」に述べている通り、「医の名言」は先人の苦闘と苦悩の間から生まれたものだけに、味わえば味わうほど教えられることが多い。いわばこれが本書の心臓部、すなわち珠玉である。名言には古語が多いので、著書はルビを付して、詳しい注釈を加え読者の理解を便にしている。

『黄帝内経素問』には「聖人はすでに病みたるを治せず、未だ病まざるを治す」という名言があるが、これこそ医学の根本であり、現代の予防医学の思想である。

『医心方』発刊の数奇な運命が記されている。「医の名言」として『医心方』の白眉である十二の少を行うことが養生の

肝要であると説いている。十二の少とは少思、少念、少欲、少事、少語、少笑、少愁、少喜、少怒、少好、少悪で楨佐知子訳が書いてある。

古語としての「文明化は梅毒化である」東大土肥慶蔵教授は梅毒の移入はコロンブスの「新大陸移入説」を唱えたが、これには種々の異説のあること、すなわち最近の生態学的、歴史的観点によるバイオヒストリーの研究成果は「太古存在説」の検討も必要なことが述べられている。

ジョナサン・スウィフトは『ガリヴァー旅行記』の作者として誰でも知っている。第一編が小人国、第二編が大人国に続いて不死人間の島(ラグナグ島)のあることは余り知られていない。不老長寿は人類万人の願ひである。長寿は洋の東西を問わず人々の悲願であろう。しかし長寿が本当に「しあわせ」なのであるか。二百年以上も前に不老長寿を痛烈に非難した人物がガリヴァーであった。彼は「自分がもし不死なら、死の恐怖から解放され、長者になれるし、大学者になれるであろう」と夢見た。しかし直接不死の国で見たものは、老醜極まりない不死人間であり、永遠の憩いの港に着けない哀れな自分の姿に辟易するのであった。

大槻玄沢「人身は自然の一大良医なり。医のその事に従うは、なお臣僕の使命に供するがごとし。」この言葉はヒポクラテスの医学思想を代表するものとして『盤水存響』から取ったものである。古くから漢方医は神農(炎帝)を冬至の日に祭る習慣があった。杉田玄白、大槻玄沢の時代になり、蘭学が

勃興してからは、神農の代りにヒポクラテスやヘイステルを取り上げ、西洋紀元一月一日に「新元会」(オランダ正月)を祝った。

佐野常民「赤十字社の趣旨は報国恤兵(じゅうっぺい)という四字であります」

赤十字そのものの原点は、敵味方の区別なく、戦病傷者を看護することである。恤兵もまさにその意味である。赤十字社を創設した人アンリ・デュナンはたまたま北イタリアのソフェリーノで四万人の死傷者を出す大戦闘が行われたさい、そこを通りがかった。「みんな兄弟」の考えの下に、一八六四年赤十字国際会議が結成された。

明治十年西郷隆盛は熊本城に兵を進めた。田原坂や植木坂の惨状を見聞した佐野常民は同年「博愛社」の設立嘆願書を提出して許可された。これが十年後の明治二十年「日本赤十字社」に発展するのである。

「日本ノ医者ガ世界中最モ早ク野兎病ノ臨床的觀察ヲソノ著書ニ書イタノデアル。」大原八郎

日本の医者とは本間玄調(一八〇四—一八七二)、その著書とは『瘍科秘録』第九巻である。世界中もつとも早くとは一八三七(天保八)年のことである。アメリカの発表は七十四年後の一九一一年であった。昔から、斃死した野兎を食べると不明の病原体により、発熱、頭痛、腋下リンパ節腫脹などの奇病すなわち野兎病が起こることを本間玄調が最初に発表した。その後大正十二年以来、福島の大原八郎医師は本病をさ

らに詳しく発表した。

明石海人 日本における誤ったハンセン病の歴史を明石海人なる人物を通して描いている。ハンセン病は長い間伝染病と考えられていた。アルマウエル・ハンセンにより癩菌が発見され、明治三十年の国際会議でハンセン病が伝染性疾患であると確認された。その後も日本政府は誤った解釈の下に、十三の国立癩療養所と、三か所の私立癩療養所にすべてのハンセン病患者を収容した。患者は時には犯罪者のように取り扱われた例もあった。明石海人は二十八歳の時、癩を発病、長島療養所へ送られた。のち癩性角膜炎で失明、ひとり寂しく離れ小島で死んだ。ハンセン病患者の強制隔離などを規定した『らい予防法』を廃止するための立法案が参院本会議で全会一致で可決成立したのは何と平成八年三月二十七日の午後のことであった。

『続・医の名言』には以上のほか、多数の事例が紹介されている。

(大滝 紀雄)

〔中央公論社・〒104-8320東京都中央区京橋二一八一七、電話〇三
一三五六一一四三二、平成十年五月、四六判二二六頁、本体
一六〇〇円〕。

青木 歳幸 著

『在村蘭学の研究』

かねて『実学史研究』（実学史研究会・代表末中哲夫）をより

所として研究論文の発表を続けて来られた著者が、他の拠点『信濃』や『日蘭学会誌』・『蘭学資料研究会報』・『在村蘭学の展開』（田崎哲郎編）そのほかに寄せられた論文も合わせて、修正・加筆を加えながら集大成された。著者のこれまでの三十年に近い研究活動の成果を一冊に凝縮されたのが本書である。

最初に本書のタイトルを知ったとき、第一に「この著者はもしかしたら田崎哲郎教授のお弟子さんでは、愛知大学で学ばれた方では？」と思った。それは少し外れてはいたようだが、田崎教授による三河地方を中心とした一連のライフワークを、信濃地方に移し換えて、その学統を継ぐ研究と拝見した。信濃地方の庶民医療史の実証的研究であるが、換言すれば、少し粗雑すぎる表現かも知れないが、「幕末期信濃地方の草の根蘭学史」とも言えるのではなからうか。ここで史料収集に傾注された著者の努力は全く敬服のほかはない。もちろん著者は県立歴史館勤務という甚だ有利な立場におられたこともあろうが、本書の強みは何といっても豊富な歴史資料を基盤に、それを縦横に駆使して論考を展開されたことである。以下に著者自身が本書の「まえがき」に記された各章の概略から要約を試みる。

第一章 在村蘭学の定義、蘭学研究史および在村蘭学研究史の整理、各地の蘭学塾とその門人たちの活動、在村蘭学の浸透につれて各地の医療環境に起った変化の素描。

第二章 各地の蘭学塾門人帳そのほかから信濃の蘭学者を